



# 世界の文学

16

ドストエフスキイ

罪と罰

中央公論社

世界の文学 16

©1963

---

ドストエフスキイ

訳者 池田健太郎

昭和38年2月4日初版発行

昭和44年3月20日32版発行

---

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

罪  
と  
罰  
目  
次

年 解  
譜 説

598 584 3



罪  
と  
罰

「罪と罰」当時のペテルブルグ市街



## 第一部

七月はじめ、猛烈に暑いさかりのある日の夕方ちかく、ひとりの青年が、S横町の下宿の小部屋から表通りに出て、のろのろと、ためらいがちに、K橋のほうへ歩きだした。

彼は運よく階段で主婦と顔を合わさずにすんだ。彼の部屋は高い五階建てのアパートの屋根裏にあつて、部屋というよりは物置に近かつた。食事と女中づきでこの小部屋を貸してくれた下宿の主婦は、一階下の別の貸室に住んでいて、外出するたびに青年は、たいていいつも階段に向かつて開け放してある主婦の台所の横を、必ず通らねばならなかつた。そして青年はそのたびに、そこを通りながらある病的な気おくれを感じて、それが恥ずかしく、またそのために顔をしかめた。主婦に借りがいっぱいいたまうていて顔を合わすのがこわかつたのである。昔は、彼はそんな気の弱いいじけた青年ではなくて、

むしろその反対でさえあつた。それがいつのころからか、ヒポコンデリーに似た、神経過敏な、いらいらした気持に変わつていた。強情に自分の殻に閉じこもつて世間から遠ざかり、主婦はおろかだれと顔を合わすのも恐ろしくなつた。貧乏に打ちひしがれてもいた。が、最近はずつぱつまった急場でさえも平気になつた。露命をつなぐ仕事もすつかりやめ、しかも新たに始める気もなかつた。だから實際のところ、どんな悪企みが仕組まれようと、たかが下宿の主婦ふぜいはいっこうにこわくはなかつたのである。けれども、階段で捕まつて、何の面白味もない、月並みな馬鹿げた世間話だの、おどしや泣き言まじりの例のしつこい金の催促だのを聞かされたり、それを切り出された手前、こつちも逃げを張つたり、あやまつたり、嘘八百を並べたり、——いやもう、それぐらいなら、いっそ猫のようにそつと階段をすり抜けて、だれにも気づかれずに逃げ出すほうがましである。

ところが今日は、表通りへ出ると同時に、あんまり自分が主婦との出会いを恐れているのに、われながらあきれ返つた。

『こんな大事を企てながら、何たる詰まらぬことにびくびくしているんだ！』と彼は、奇妙な薄笑いを浮かべながら考へた。『ふむ……そうだ。……一切は人間の手のうちにある、それをみすみす逃すのは、ひとえに臆病だ



からだ。……こいつは立派な公理だぞ。……じゃ、人間がいちばん恐れるのは何だろう。新しい一歩、新しい自分自身の言葉を、人間はいちばん恐れているのだ。……待てよ、おれはあんまりしゃべりすぎるぞ。しゃべりすぎるから、それで何もしないのだ。いやそうじゃない、何もしないから、それでしゃべりすぎるのかな。おれがこんなひとり言を覚えたのは、ここの月のことだ。毎日、部屋に寝そべって、あほらしいことを考えながら。……時に、おれは今、何のために歩いて行くんだっけ。いったいおれにそれができるだろうか。いったいおれはまじめな話なのか。いや、まじめな話なのか。ただ幻想のために自分で自分を慰めているんだ、遊戯なんだ！ そうだ、きつと遊戯なんだ！』

往來は恐ろしい暑さで、そのうえ息苦しさを、雑沓、至る所の町角にある漆喰、材木、煉瓦、砂ほり、それに別荘を借りる余裕のないペテルブルグの住人ならだれでもが知っているあの独特な真夏の悪臭、——それらが一度にどつと襲いかかって、ただでさえ調子の狂っている青年の神経を不愉快にゆすぶった。市内のこのあたりには特に多い居酒屋から放たれるやりきれない悪臭と、平日なのに絶えず行き会おう酔っぱらいの群とが、こうした光景のいやらしい、憂鬱な色彩をいっそう完璧に塗りあげていた。深い嫌悪感が、青年のデリケートな顔をち

らりとかすめた。ついでに言うると、彼はきわ立った美男子で、目は涼しく黒ずみ、髪は栗色で、背丈は並みよりも高く、すらりと整った体つきをしていた。だが、すぐに彼は深い物思いに、いっそう正確に言えば、ある忘我の境におちいったと見えて、それなりあたりには目もくれず、いや、目をくれようともせずに歩きだした。ただ時々、今さっき自分で認めたばかりのひとり言の癖が出て、何かしきりにつぶやいていた。そうした瞬間、彼は自分でも、思考が時々混乱して、自分がひどく衰弱しているのに、ふと気づいた。——これで二日、青年はほとんど何も食べていなかったのである。

彼はひどい服装をしていた。他の人だったら、慣れっこになつた人でさえ、真つ昼間こんなボロを着て往來へ出るのは気がひけたに違いない。もつとも、この界限が服装では容易に人の度胆を抜けないような場所柄であった。センナヤ(草)広場に近いこと、いかがわしい遊び場がたくさんあること、それに何と言つても、ここペテルブルグのどまん中の表通りや横町に密集して住む工員や職人などが、時々あたり一帯の眺望を、ひとの風体に驚くほうがおかしいような連中の姿で汚すのである。しかし青年は、敵意にあふれた侮蔑が心に積もり積もっていたので、生來の、時にはたいそう若々しい潔癖さにもかかわらず、往來で自分のボロ服姿を恥ずかしがる気持は

いっこうになかった。もちろん、知人とか、以前の友人など、総じて彼が会いたがらぬ人々に出会えば、話はまた別である。……ところが、そのうちに、ひとりの酔っぱらいが、——今時分この往来を、大きな運送馬のひく馬鹿でかい荷馬車で、何のために、どこへ運ばれて行くのかしれないが、——通りすがりに突然、「やい、このドイツ帽子め！」とどなって、片手で彼を指さしながら、大声でわめきはじめて時には、さすがの青年も思わず立ち止まって、反射的に自分の帽子を引っつかんだ。それは丈の高いチンメルマンの丸帽子だったが、もうすっかりくたびれて人参色に変わり、穴ぼこやしみがいっぱいでき、つばがちぎれ、片隅がひどく不体裁に横へひしゃげていた。もっとも、そのとき青年を襲ったのは、恥ずかしさではなく、驚愕にも似たまったく別の感情だった。「やっぱりそうだ！」と彼は狼狽してつぶやいた。「そうだろうと思った！ こいつが何よりもまずいんだ！ こうしたある種の愚かさ、ある種のつまらない些細なところが、計画ぜんぶを台なしにすることがあるんだ！ そうだ、この帽子は目立ちすぎる。……滑稽だから、目立つんだ。……おれのこのポロ服には、古せんべいみたいなのもいい、ぜひとも学生帽が要るんだ。この化物じやなしに。こんな帽子はだれもかぶらないから、一キロ先からでも目について記憶に残る。……重要なことだぞ、

あとまで記憶に残ったら、立派な証拠じゃないか。今はなるべく目だたないでいなけりゃ。……些細なことが、些細なことが肝心なんだ！……この些細なことが、いつもすべてをぶち壊すんだ。……」

道のりはいくらもなかった。彼は下宿の門口から何歩あるかさえ知っていた。——きっかり七百三十歩だった。ある日、空想にふけていた時、数えてみたのだ。そのころは、われながらまだ自分のこの空想が信じ切れず、ただその醜悪な、だが誘惑的な大胆不敵さにいらいらしていた。それがひと月たった今は、もう別の目で眺めるようになり、例のひとり言で自分の無力やためらいをしきりにあざ笑いながらも、いつかわれ知らずその《醜悪な》空想を、相変わらず自分が信じ切れなかったけれども、立派な一つの計画と考えるのに慣れてしまった。現に今も、彼はその計画の下見をするために歩いているので、彼の胸騒ぎは一步ごとにいっそう高まっていった。彼は心臓をどきどきさせて神経的なふるえを覚えながら、一方の壁がどぶに、もう一方の壁が△△通りに面している巨大な建物に近づいた。この建物は全部が小さな貸室になっていて、仕立屋や錠前屋など、あらゆる職人や、料理女、いろんなドイツ人、売春婦、小役人などが住んでいた。二つの門と二つの中庭とは、人の出入りがたいそう激しかった。門番も三、四人は勤めていた。青

年は、ひとりも門番に出会わなかったのを喜びながら、門をくぐるとすぐ、右手の階段へそつと滑るように入つた。階段は暗くて狭く、《裏返し》然としていたけれど、彼はもうすっかり熟知して、むしろそうした環境が気に入っていた。こういう暗闇のなかなら、好奇の眼差も危険ではないのである。『今からこんなにびくびくしていちゃ、いざあのことを決行する場合になったら、どうなるだろう……』——四階目へ昇りながら、ふと彼はこう思った。その時、彼の行く手を、ある部屋から家具を運び出す兵隊あがりの運送屋がふさいだ。青年は以前から、その部屋に家族もちのドイツ人の役人が住んでいるのを知っていた。『ははあ、あのドイツ人め、引越すんだな。』とすると、四階には、この階段にもこの踊り場にも、当分の間あの婆さんしかいないわけだ。こいつはうまいぞ、……いざというときに……』——彼はまたもやこう考えて、それから婆さんの部屋の呼び鈴を鳴らした。呼び鈴は、銅ではなくてブリキで作つてあるらしく、弱々しくがらんと鳴った。こういうアパートの、こういう小さな貸室には、こういう呼び鈴があるのが常である。青年はこの鈴の音を忘れていたが、今その独特な音を聞くと、ふいにあることを思い出して、はつきりと頭に思い描いたらしかった。……彼はぎくりと身ぶるいした。神経が極度に衰弱していた。しばらくすると、

ドアが細目に開いて、隙間から女主人が、さもうさん臭そうに來客の様子を眺めまわした。と言つても、闇のなかに彼女の小さな目がきらきら光るのが見えただけである。やがて、踊り場に大勢人がいるのに気づくと、女は元気づいて、ドアを全部開けた。青年は敷居をまたいで、板壁で仕切られた暗い玄関の間へ足を踏み入れた。仕切りの向こうは、狭い台所になっていた。老婆は黙つたまま彼の前に立つて、物問いたげに見つめていた。それは六十歳ぐらいの、鋭い、意地の悪そうな目と、小さな、先のとがった鼻をした、頭巾もかぶらぬ、小柄な、ひからびた老婆であつた。ほんの少し白髪のみじつた亜麻色の髪には、油をたっぷり塗つていた。鶏の足のように細くて長い首には、何やらフランネルのボロ切れを巻きつけ、肩には、この暑いのに、すり切れて黄ばんだ、毛皮の袖なしがだぶついていた。老婆はひっきりなしに咳をして、喉を鳴らしていた。青年が何か特別の目つきで彼女を見たのだから、ふいに彼女の目に、またもやさっきのうさん臭さがひらめいた。

「ラスコーリニコフですよ、大学生の、ひと月ほど前にかがったことのある——」青年は、なるべく愛想よくする必要があると思ひ出して、軽く会釈をしながらいでこう言った。

「覚えてますよ、よく覚えてますよ、あなたが見えたこ

とは「相変わらず物問いたげな目を離さずに、老婆は歯切れよくこう言った。

「実は……また、例のことで……」とラスコーリニコフはいささか当惑して、老婆の疑り深さに驚きながら言葉をつづけた。

『もつとも、いつもこうなのかもしれない。この前は気がつかなかったただけなんだ』彼は不愉快な気持を覚えながら、こう思った。

老婆はためらいがちにしばらく無言でいてから、ふと脇へ身を引いて、奥へ通じるドアを指さし、客を先へ通しながらこう言った。――

「お入りなさい、あなた」

青年の通されたあまり大きくない部屋は、黄色い壁紙を貼りめぐらし、窓にセラニュームの鉢植を置いて、モスリンのカーテンを掛けてあったが、折から夕日を受けて明るく照らし出されていた。『あの時も、きつとこんなふうに日が射し込んでいることだろう!……』ふとこんな考えが、ラスコーリニコフの頭にひらめいた。彼はすばやい視線を部屋じゅうに走らせ、できるだけ部屋の様子を観察し記憶しようとする。けれども、部屋には何ひとつめぼしい物はなかった。家具は、どれもたいそう古びた、堅木材のものばかりで、彎曲した大きな木製の寄りかかりのあるソファと、その前の楕円形の丸テー

ブルと、窓と窓との間の壁ぎわに置かれた鏡台と、壁にそって並べた数脚の椅子と、黄色い額縁に入った、小鳥を抱くドイツ人の令嬢を描いた安物の絵が二、三枚と、

これが全部だった。部屋の隅の小さな聖像の前には、とうみょう燈明がともっていた。すべてが非常に清潔だった。家具も床も、艶あざの出るまで拭き込まれて、すべてがびかびか光っていた。『リザヴェータの仕事だな』と青年は思った。塵ひとつ見あたらなかった。『意地悪な年寄りの未

亡人の住まいは、えてしてこんなふうに清潔なものだ』――ラスコーリニコフはつづけてこう思いながら、奥の小部屋へ通じる戸口の前の更紗さらのカーテンを、好奇心にかられて横目でちらりと眺めた。その小部屋には婆さんの寝台と箆筒たすがあったが、彼はまだ一度ものぞいたことがなかった。住まいはこのふた部屋だけだった。

「ご用事は？」老婆は部屋へ入って来て、またもや彼のまんな前に立ってじつと顔を見つめながら、きびしい口調でこうたずねた。

「質草を持って来たんです、ほら！」青年はポケットから、平べったい、古い銀時計を取り出した。時計は裏ぶたに地球儀が描いてあった。鎖は鉄だった。

「でもね、前のがもう期限ですよ。おとといで、まるひと月」

「もうひと月分利子を払います。少し辛抱してください」

い」

「辛抱しようと今すぐあなたの品物を流そうと、あたしの勝手ですよ」

「この時計は奮発してもらえますか、アリョーナ・イワノヴナ」

「つまらない物ばかり持って来るんだね、あなた、一文の値打ちもない。この前は指輪にお札を二枚も出してあげたけれど、あれなんか宝石屋へ行けば、新品が一枚半で買えるんだよ」

「四ルーブリほど貸してください。きっと受け出します、親父のだから。もうすぐお金が入るんです」

「一ルーブリ半だね、利息先取りで。それでよければ」

「一ルーブリ半！」と思わず青年は叫んだ。  
「お好きなように」老婆はこう言って時計を突き返した。青年は時計を受け取ったものの、あんまり腹がたつたので帰ろうと思ったが、これ以上どこへ行くあてもなし、また他に用事もあって来たのを思い出して、すぐに考えなおした。

「じゃ貸してもらおう！」と彼は乱暴に言った。

老婆はポケットへ手を入れて鍵束をさぐり、カーテンの奥の部屋へ行った。青年はただひとり部屋の中央に取り残されると、わくわくしながら聞き耳を立てて想像をめぐらした。箆笥たんすのあく音が聞こえた。『上の引出しだ

な』と彼は想像した。『鍵は右のポケットにある。……鉄の輪で束にして。……ひとつうんと大きい、他の三倍もある、ぎざぎざの鍵があったが、あれはむろん箆笥の鍵じゃない。……とすると、他にまだ手箱が長持があるわけだ。……こいつは面白いぞ。長持にはたいいああいう鍵がついている。……だが、何というあさましいことを……』

老婆が戻って来た。

「じゃあ、あなた、月に一ルーブリあたり十コペイカとして、一ルーブリ半で十五コペイカ、ひと月分先に頂戴しますよ。それから、この前の二ルーブリの口も、同じ勘定で二十コペイカ先取り、あわせて三十五コペイカ。で、あの時計であなたの受け取る分は、一ルーブリ十五コペイカ。さあ、お持ちなさい」

「え！ じゃたった一ルーブリ十五コペイカ！」  
「そのとおりですよ」

青年は、おとなしく金を受け取った。彼は老婆の顔を見つめたまま、すぐには帰らなかつた。まるで何かまだ言いたい、したいことでもあるように。もっとも、それが何かは、彼自身にもわからないらしかつた。……

「ことによると、アリョーナ・イワノヴナ、四、五日うちにもう一品、持って来るかもしれませんよ、……銀の……立派な……シガレット・ケースを。……友だちか

ら返してもらつたら。……」彼はどきまぎして、口をつぐんだ。

「それはその時の話だよ、あなた」

「じゃ、さようなら。……時に、あなたは始終おひとりなんですね、妹さんはお留守？」玄関へ出ながら、青年はなるべくくだけた調子でこう聞いた。

「妹に何か用事があるのかい？」

「いや、別に。ただ聞いてみただけですよ。それをあなたはすぐに……。さようなら、アリョーナ・イワーノヴナ！」

ラスコーリニコフは、すっかり面くらつて外へ出た。

狼狽はだんだん激しくなつた。階段を降りながら、彼は何度か、まるで突然何かにおびえたかのように立ち止まつたほどである。ようやく通りへ出ると、思わず彼はこう叫んだ。

「ああ！ 何たる嫌悪すべきことだ！ いったい、いったいおれが……。いや、これは馬鹿げたことだ、笑止の至りだ！」彼は断固としてこうつけ足した。「実際、よくもこんな恐ろしいことが、おれの頭に浮かんだもんだ。

それにしても、おれの心は何という不潔なことに適しているんだ？ 何よりも、不潔じゃないか、卑劣じゃないか、醜悪じゃないか、醜悪じゃ……。それなのに、おれはまるひと月も……」

しかし彼は、言葉でも叫びでも自分の興奮を表現できなかった。老婆の住まいへ向かう途中から彼の心を圧倒し混濁させていた限りない嫌悪感が、今や計り知れない規模に広がって、あまりにもはつきりと浮かびあがってきた結果、彼はどうすれば憂鬱な気持から逃げられるのか見当もつかなくなつた。青年は、道行く人々にも気づかず、彼らとぶつかりながら酔っぱらいのように歩道を歩いて行って、ようやく次の通りへ来てふとわれに返つた。あたりを見まわした彼は、自分がある酒場のそばに立っているのに気づいた。その酒場の入口は、歩道から階段で地階へ降りるようになっていた。その時、ドアの奥からふたりの酔っぱらいが出て来て、たがいにまたれ合い、ののしり合いながら、通りの上へあがって来た。ラスコーリニコフは、ちよつと考えてからすぐに階段を降りて行つた。それまで彼は一度も酒場へ入つたことがなかつたけれど、今は目まいがしていたし、それに焼けつくような喉の渇きが彼を苦しめていた。彼は冷たいビールがぐつと飲みたく、それ以上にまた、突然の体の衰えの原因を空腹にありと思つたのである。彼は暗い、きかない片隅の、ねばねばする小テーブルの前に陣どつてビールを注文し、貪るように最初の一杯を飲みほした。と、たちまち気分が晴れて、考えがはつきりしてきた。

『あれはみんな馬鹿げたことだ』と彼は、希望を抱いて

つぶやいた。「面くらうことなんか、何もなかったんだ！ 体の調子が悪かったただだ！ 一杯のビールと、乾パン一箇で、——このとおり、いっぺんに頭はしっかりする、考えははつきりする、意志も強固になるんだ！ ちえっ、何たるつまらんこった！……」ところが、こんなふうに関を軽蔑しながらも、彼は何か恐ろしい重荷から急に解放されたように明るい顔つきになって、愛想よくあたりの人々を見まわした。もともこの瞬間でさえ彼はほんやりと、こうした幸福な気持がこれもまた病的なのだと思っていた。

酒場には、この時あまり客がいなかった。階段で出会ったふたりの酔っぱらいのほかに、彼らのあとから女づれの五人ばかりの男が、手まわしオルガンを鳴らしながらどやどやと出て行った。彼らが出て行くと、店は静かになって、ひろびろとしてきた。あとには、ビールを前に坐っている、ほろ酔い機嫌の町人風の男と、シベリヤ帽をかぶって灰色のひげを生やした、大柄な、太ったその連れの男が残った。この連れの男はひどく酔っぱらっていて、腰掛けの上でうとうとまどろみながら、時々寝ぼけたように急に両手を広げて指を鳴らしたり、腰をあげずに上半身だけで飛び上がるような格好をしはじめ、そのたびに歌詞を思い出そうと苦勞しながら、こんな馬鹿げた歌を口ずさんでいた。——

まる一年、女房を可愛がった、  
マル一年、ニョウボウヲ、可愛ガッタ……

かと思うと、急に目をさまして、また——

ポジャーチェスカヤ通りを歩いていたら、  
前の女房をふと見かけた……

けれども、だれひとり彼と幸福を分けあう相手もいなかった。むっつりした彼の同僚は、相棒の上機嫌をむしろ憎々しい疑惑の目つきで眺めていた。そのほか酒場には、もうひとり退職官吏らしい風采の男がいた。彼はウオツカの小壘を前に、ひとりぼつんと腰をおろして、時々ひと口飲んで、あたりを見まわしていた。彼もまた、いくぶん興奮しているらしかった。

## 二

ラスコーリニコフは人なかへ出つけず、とりわけ最近には、前に述べたとおりあらゆる交際を避けていた。ところが今は、急に何か彼を世間の人に引きつけた。何か新しいあるものが彼のなかに生まれて、それとともにある人恋しさが感じられた。彼は、まるひと月ものあの集

中的なもだえと陰気な興奮とのためにへとへとに疲れて、たとい一分間でもいい、どんな所でもいい、ふだんと違った世界で一息入れたかった。そこで彼は、あたりの汚なさには目をつぶって、さも満足そうに酒場に腰をすえたのである。

酒場の主人は別の部屋にいたが、どこからか階段を降りて来てたびたび店へ顔を出し、そのたびに大きな赤い折り返しのある、靴墨を塗ったしやれた長靴がまず最初に現われた。彼は半外套の下に、ネクタイなしで恐ろしく油じみた黒じゆすのチョッキを着込み、顔じゆうが錠前のように脂ぎっていた。店台の向こうには、十四歳ぐらいの少年がいたが、その他にもうひとりもつと若い男の子がいて、注文があるとこの子が運んで来た。小さなきゆうりや、黒い乾パンや、薄く切った魚が並べてあって、それらが実にいやな匂いを放っていた。息苦しくて、坐ってられないほどだった。それに酒の匂いが浸み込んでいて、その空気を吸っただけで、五分もたったら酔っぱらいそうな気がした。

よく世間には、一面識もないくせに、まだ言葉をかわす以前から、急に一目見るなり興味を覚えるような、そういう人との出会いがあるものである。ちょうどそんな印象を、今やや離れて坐っている退職官吏らしい例の客がラスコーリニコフに与えた。青年はのちに何度かこの

最初の印象を思い出して、それが虫の知らせだったと考えた。彼はたえずその役人に視線を送った。もちろんそれは、向こうが執拗に彼のほうを眺めて、さも話がしたくてならぬいらしたためでもある。店主を含めて酒場に居合わせた他の人々に対しては、役人は慣れっこになつてもう見飽きたような、それとともに、まるで身分も教養も低い、話し相手にもならぬ連中に対すかのような、一種傲慢な軽蔑の目つきで眺めていた。それはもう五十を越えた、中背のがつしりした体格の男で、白髪まじりの頭が大きく禿げ、絶えざる飲酒のためにむくんだ、黄色い、むしろ青味がかつた顔をして、はれぼつたい両眼の奥から、裂け目のように小さい、その代わり熱をおびた、赤らんだ目が光っていた。ただこの男には、何かひどく奇妙なところがあった。その眼差にはいわば感激家らしい輝きがあつて、恐らくは思慮も分別もあつたらしいのだが、と同時に何か狂気じみた光がひらめいていたのである。彼はボタンがちぎれた、古い、ぼろぼろの黒い燕尾服を着ていた。たった一つだけ、ボタンがやつとついていたが、それを彼は、いかにも礼儀作法を失うまいとするらしくきちんと掛けていた。南京木綿のチョッキの下からは、しわくちやの、きたない、酒のみみだらけの胸当てが顔を出していた。顔は役人風に剃っていたが、それももうだいぶ以前のことらしく、鳩色の



固そうなひげが一面に伸びかけていた。彼の態度には、実際にどっしりした、役人らしいところがあった。そのくせ彼はそわそわして、頭髮をかきまわしたり、酒がこぼれてべとべとするテーブルの上に穴のあいた両肘をついて、さも憂鬱そうに両手で頭を支えたりした。とうとう彼は、ラスコーリニコフをまともに見つめて、大きなしつかりした声で話しかけた。――

「失敬ですが、あなた、一つ上品な話の相手をしちゃ頂けませんまいか。と言いますのが、ご様子こそあまり映えないが、私は年の功で、あなたが教育のある方で、あまり酒を飲み慣れておられんのがわかるのです。いや、私も常々誠意と合体する教養を尊敬してはましてな、それほどばかりか九等官の末席を汚しています。マルメラードフ、――これが姓で、九等官です。で、失敬ですが、あなたはお勤めですか」

「いや、勉強中です。……」と青年は、相手の一風変わった大げさな話しぶりと、あんまりまともに話しかけられたのにいささか面くらって答えた。ついさつき、どんな相手でも言葉をかわしてみたいと思つた一瞬の希望もどこへやら、さて現実話しかけられて見ると、最初の言葉を聞いただけで突然、彼は自分の私生活に触れるか、触れようとすべからぬ他人に対して感じる、いつもの不愉快な、いらだたしい嫌悪感を味わつた。

「すると学生さん、と言うよりも学生さんだったんですな！」と役人は叫んだ。「そうだろうと思つてましたよ！ やっぱり年の功ですな、あなた、長年の年の功ですな！」こう言つて彼は、自慢のしるしに額へ指を一本あてた。「学生さんだった、つまり学問の畑を歩いておられた！ いや、一つご免をこうむつて……」彼は立ち上がると、二、三度よろけてから自分の酒壇やコップを引つつかんで、青年のそばのやや斜め向かいに腰をおろした。酔つてはいたが、彼は威勢よく雄弁に話した。ただところどころ多少まごついて、言葉を引つ張るだけだった。まるでまるひと月のあいだ、彼もまただれとも話をしなかつたかのように、むさぼるようにラスコーリニコフに襲いかかった。

「あなた」と彼は、ほとんど勿体ぶつた口調ではじめた。「貧乏は罪ならず、これは真理ですな。飲酒は徳ならず、これも私は承知している。このほうがいっそう真理ですな。とところが、あなた、貧乏も度が過ぎると、――これは立派な罪ですな。貧乏のあいだはまだ、生まれながらの感情の高潔さを保つていられるが、度が過ぎるとそうはいかない。度が過ぎた貧乏となると、人間仲間から棒つ切れで追い出されるどころじゃない、こつてり骨身にこたえるように、箒で掃き出されちまう。しかも、それがまったく正しいというわけは、度が過ぎると、私